

パーリ阿毘達磨における名について

玉 井 威

I

本稿で扱う *nāma* (名) は、主として名称・名辞としての *nāma* である。特にパーリ阿毘達磨で説かれる *adhivacana* 等の *nāma* の類語および *nāma* の分類を検討することによって、*nāma* 機能的・構造的特質を明らかにしようとするものである。

II

名称・名辞としての *nāma* は、Dhs. (1306~1308)において *adhivacana* (増語), *nirutti* (詞), *paññatti* (施設) という一連の類語の形で用いられ定義されているから、まずそれから見ていくことにする。*adhivacana* については次のように説かれている。

およそあらゆる法の呼称 (*saṅkhā*), 通称 (*samañña*), 施設 (*paññati*), 言説 (*voḥāra*), 名 (*nāma*), 名業 (*nāmakamma*), 名号 (*nāmadheyya*), 詞 (*nirutti*), 文字 (*vyañjana*), 表現 (*abhiḥāpa*), これらが増語法である。一切法は増語路 (*adhivacanapatha*) である。

nirutti と *paññatti* についても、これと全同の定義がなされ、それぞれ、一切法は詞路 (*niruttipatha*), 施設路 (*paññattipatha*) であると結んでいる。これらによると、*adhivacana* 等の三が、*saṅkhā* 以下さまざまな呼称の総称のようにも見られるが、これらの定義が同一であることからわかるように、これらは、それぞれその語義 (*padattha*) に多少の差異があるとは言え、ここではその差異は重要ではなく、重要なのは、後の「一切法は増語路 (詞路, 施設路) である」という点であろう。つまり、一切の法は、言葉によって表わされ、言葉によって知らしめられるものである、という点であろう。言葉には対象指示機能、意味伝達機能があるという *adhivacana* を初めとする言葉の機能的構造的特質が語られていると言ってもよいであろう。こういう点は Dhs. の註釈書である *As.* を見れば、一層明らかとなろう。*As.* (p. 391) によると、例えば「一切法は増語路である」というのは、次のように註釈されている。

『一切法は増語路である』とは、増語にとって路に非ざる法は存しない。一法は一切法に入り (*nipatati*)、一切法は一法に入る。如何にしてか。この名施設 (*nāmapaññatti*) が一法であり、それが一切の四地法 (*catubhūmikadhammā*) に入るからである。有

情、行 (saṅkhāra) にして名を離れたものはない。森や山などにある樹も、地方の住人にとっては仕事である。彼らが「この樹の名は何か」と尋ねられると「カディラ」とか「パサーラ」と自分の知っている名を告げる。名が知られていないものでさえ、「名のない[樹] (anāmaka) である」と言う。それさえも、それ (樹) の名号 (nāmadheyya) としてある。

この中で、各施設というのは、しばしば義施設 (atthapaññatti) と対で用いられるもので、後者が施設せしめられる故の施設 (paññāpiyattā paññatti), つまり言葉の指示対象、概念内容である施設 (所詮) であるのに対して、前者は施設せしめる故の施設 (paññāpanato paññatti)¹⁾, つまり名辞としての施設 (能詮) のことで、「(名施設の) 一法が一切法に入る」というのは、一切法 (四地法) で名を離れたものはない、つまり一切法は名施設の一法を有するから、「(名施設の) 一法が一切法に入る」と言われたのであり、また逆に、一切法は名施設として現わされ知らしめられるわけだから、つまり名施設の一法に包摂されるわけだから、「一切法は(名施設の) 一法に入る」と言われたものと思われる。増語路の路 (patha) とは、名の適用される範囲 (range) ないしはその範囲にある諸法、というほどの意味であろう²⁾。

このように、全てが名として現わされ知らしめられる、という考え方の萌芽は、すでにニカーヤ文献に見られる。例えば、相应部一卷 Addhavagga の nāma と名づけられた詩句において、「何物がすべてに勝り、すべては何の一法に従属するか」という神 (devatā) の問いに対して、世尊は「名 (nāma) はすべてに勝り、名より勝れたるものなし。名の一法にすべては従属す」(S.I, p. 39) と答えている。これに対する註釈 (Spk. I, p. 95) によると、「名がすべてに勝る」を次のように説明する、

何となれば、無因名 (opapāṭikanāma) であれ、人為名 (kittimanāma) であれ、名を離れた有情とか行は存在しない。木であれ岩であれ、これがその名であると知られていないものでさえ、『名なきもの』というのがその名であるからである。

ここに出てくる無因名 (自然発生名、非人為名) と人為名については、後で名の分類を考察する際に取りあげることにして、この註釈の説明は、一見して先の As. のそれと同趣旨であることがわかる。このようにこの註釈に従えば、先程の相应部の一節においても、名の構造的・機能的特質が語られていることがわかる³⁾。

次に、adhivacana 等について、更に詳しく註釈文献に従って考察してみよう。

まず、再び As. (p. 51) の所説によれば、adhivacana と nirutti と paññatti は、意味よりすれば (atthato) 差異はなく、ただ文字 (byañjana) だけが異っているという。確かに、Dhs. におけるそれらの定義が三つとも全同であったように、名称・名辞という点で差異はないようである。しかし、Moh. が言うように⁴⁾、語義 (padattha) に差異がある。As. においても、この後、それぞれの語義が述べられている。それによると、adhivacana は次の通りである。

福増大者 (sirivaḍḍhaka) 財増大者 (dhanavaḍḍhaka) などの如く、語のみ (vacana-matta)⁵⁾ に依って (adhikāraṃ katvā) 転起したものであるから、増語 (adhivacana) と言われる。

語のみに依って転起したものとは、語義とか語源といったものを考慮に入れないで生じた名称ということのようで、例として福増大者とか財増大者とかをあげ、そういう名称が adhvācana ということになる。ニカーヤ長部に見える adhvācanapatha (増語路) を註釈 (Sv. II, p. 503) は「福増大者・財増大者など、義 (attha) を見ないで (adisvā), 語のみに依って (adhikicca) 転起した言説 (vohāra) の路である」と言っているのも同趣旨であろう。adhivacana が語義・語源を考慮しないものであるのに対して、次の nirutti はまさにこれとは反対である⁶⁾。

nirutti の語義は As. (p. 51) によると次の通りである。

『比丘らよ、為作するから (abhisāṅkaronti) 行 (saṅkhāra) である』(S. III. p. 87) とこのように引用し、[それを] 理由として言いつつ表現されるものが詞 (nirutti) と言われる。

また paññatti は次の通りである。

思沢 (takka), 尋 (vitakka), 思惟 (saṅkappa) というように、それぞれの種類によって知らしめるから (ñāpanato) 施設 (paññatti) と言われる。

このようにそれぞれの語義が示されるが、前述の如く、ここで重要なのは、それぞれの語義の差異よりも、一切法が adhvācanapatha であり、niruttipatha であり、paññattipatha であるということ、つまり、一切法は名によって現わされ知らしめられるということであろう⁷⁾。

III

さて、その名 (nāma) を As. (pp. 390~391) は次のように四種に分類している。sāmaññānāma⁸⁾ (一般同意名), guṇanāma (徳名), kittimanāma (人為名), opapā-tikanāma (無因名) の四である。この中で、sāmaññānāma というのは、As. によれば、「初劫において大衆 (mahājana) によって選ばれ (sammanitvā) 定められ

たから、マハーサンマタ (Mahāsammata) という王の名があるというのが *sāmaññanāma* と言われる」という。次の *guṇanāma* は、説法者、持律者、三蔵者、信者などの名、或は世尊・阿羅漢・正等覺者などの如来の名は徳から出た名のことであり、*kittimanāma* とは子供が生まれたとき親族が集まってつける名であり、最後の *opapātikanāma* とは、「前の施設 (*purimapaññatti*) が後の施設 (*aparapaññatti*) と一致し (*patati*)、前語 (*purimavohāra*) が後語 (*pacchimavohāra*) と一致する。例えば、前劫においても月は月であり、今も同じ月である。」その他、太陽・海・地・山も同様で、これが *opapātikanāma* であるという。

この四つの名の中で、最も注目すべきものは第四の *opapātikanāma* であろう。前の三つの名が、恐らく三番目の *guṇanāma* も含めて人為的であると見られるのに対して、これは非人為的であり自然発生的であると見られるからであり、しかも、後述するように、As. はこれに続いて名色 (*nāmarūpa*) の名を註釈する際、四無色蘊および涅槃の名がこの *opapātika* であると言っているからである⁹⁾。つまり、このことは仏陀によって語られた受等の勝義的存在を表示する言葉、即ち仏語 (*Buddhavacana*) をどのように見るかという問題にかかわる。北伝の阿毘達磨においては、言葉論の発生をうながす契機がこの仏語に対する考察にあったと考えられているが¹⁰⁾、パーリ阿毘達磨では、筆者の知る限り、北伝のように仏語の問題を正面きって取りあげることはなかったようである。ではこの点を As. の所説 (p. 392) に従って詳しくみていくことにする。まず、*nāmarūpa* の *nāma* を *nāmakaraṇa* (名を作る) と *namana* (傾く) と *nāmana* (傾ける) の三義より定義している。その中で、受等の四蘊は名を作るという義によって (*nāmakaraṇaṭṭhena*) 名であるといい、受等は *sāmaññanāma* や *kittimanāma* や *guṇanāma* ではないことを言う。「何故なら、受等は大地等の如く、自らの名を作りつつ生ずるからで、それらが生ずるとき、それらの名が生じた。受が生ずるとき、誰も『汝は受と称せよ』とは言わない。だから、それ(受)には名をとるという働き (*nāmagahaṇakicca*) は存しない」と言う。月・太陽・星なども同様で名をとる働きはなくて、「名が生ずるとき、[それは] *opapātikapaññatti* に於いておこる。このように受が生ずるとき『汝は受と称せよ』という名をとる働きはなくて、それが生ずるとき受という名が生じた。想等も同じ仕方である」と言う。また、過去においても、未来においても、現在においても受等は受等であり、涅槃もつねに同じ涅槃に外ならない。以上、これらが名を作る義による名であるという。名色 (*nāmarūpa*) における名と名称・名辭の意味の名とはひとまず分けて考えるべきであろうが、こ

では受等の名称の成り立ちの問題を名の三義のうち第一の「名を作る義」によって説明している。名を作るといっても、他からの命名の意味ではなくて、非人為的・自然発生的に、生ずるときに自らの名を作るということを意味していることがわかる。opapātikapaññatti は opapātikānāma に外ならないであろう。

パーリ阿毘達磨では、一般に言葉とその指示対象との対応関係は saṅketa によると考えられている。つまり、その対応関係は人為的・恣意的な言語契約によるものだということである。ところが、この As. の記述を見る限り、受等の勝義的存在を表示する名称が opapātikānāma であるということは、その対応関係が saṅketa に基づくものではないということを示している。そうだとすれば、太陽・月・地等は一まず措いて勝義的存在を表示する仏陀の言葉は、世間一般の言葉とは本質的に相違し、次元を異にするものであるとの認識があったことを示していると考えられる。他の二義についても関説しておこう。As. によれば、「傾く (namana) という義によっても四蘊は名である。それらは所縁に向かって傾く (namanti) からである」という。一般に名色の名はこの義によって定義される。更に、「傾ける (nāmana) 義によれば¹¹⁾、一切も名である。四蘊は所縁に相互を傾ける (nāmeti) からである。涅槃は所縁・増上縁によって無垢法を自らに傾ける」という。

次に、As. 以外の文献にみえる名の分類を検討しておこう。まず、Vism. (pp. 209~210) においては、名は次の四種にわけられている。āvatthika (時期によるもの)、līṅgika (特徴によるもの)、nemittika (原因によるもの)、adhiccasamuppanna (無因生のもの) の四である。この中で、āvatthika は例えば牛が生長の時期に応じて様々につけられる名であり、līṅgika は有杖者・有冠者(鶏)・有手者(象)などのように特徴による名であり、nemittika は三明者・六通者・世尊など徳を原因とするもの (guṇanemittika) であり、adhiccasamuppanna は世間の言説 (lokiyavohāra) によって随意に (yadicchakaṃ) 名づけられたものであり、福増大者・財増大者など語義を顧慮しないで起ったものは、これであるという。これらの中で、As. の分類と共通するものは多くはないが、nemittika は As. における guṇānāma と一致する。adhiccasamuppanna は paṭiccasamuppanna (縁起生) とは反対で、因なくして偶然に生じたものである。一見すると、これは opapātika に似るが、先に adhi vacana (増語) の際に例として言われた福増大者・財増大者をここでもあげているように、これらは語義を顧慮しないで起ったものであっても人為的なものと考えられる。これに対して opapātika は非人為的なもの

である。

Abhidh-s-mhṭ. (p. 233) にも二種ないし四種に分ける分類がみられる。まず, nāma は「対象 (attha) に対して傾く (namati) から nāma である」として、それは anvattha (随義) によるものと, rūlhi (慣用) によるものとの二種に分けられる。更に nāma は sāmāñña (一般同意), guṇa (徳) kriyā (所作), yadicchā (随意) の四種に分けられる。Abhidh-s-mhṭ. にはこれ以上の説明がないが, Msm. (p. 468) の註釈によると, anvattha とは語義または原因に従ったもの, 原因を顧慮したもので、仏陀等の名であるとしている。As. の分類で言えば guṇanāma に相当する。次の rūlhi は逆に原因を顧慮しないで、欲求 (icchā) だけによって影響され言説されるもので、例えばティッサ (Tissa) 等の名であるという。これは As. の kittimanāma や Vism. の adhiccasamuppanna に近いであろう。次に sāmāñña や guṇa については As. にあった通りである。kriyānāma は所作 (kriyā) によって得られたもので、作者 (kāraṇa) 等の名であり、yadicchānāma とは欲求 (icchā) によって住立せられたもので、ティッサ (Tissa) 等の名であるという。後者は Abhidh-s-mhṭ. の rūlhi に相当することがわかる。以上、これら二文献には opapātikanāma は見られず、またそれに相当するものも登場していない。一方、Paṭi-a. (I, p. 307) には先程の As. と分類と同一のものが説かれている。従って opapātikanāma が登場するが、月・太陽・海・地・山を例として示すだけであって、果してそこに勝義法の名が含まれるのかどうかは判然としない。更にこの後、As. にはない「この四種の名は全て、ただ一つの名 (nāma) である。それは世間の言語契約に基づいた言葉 (lokasaṅketa) のみによって成就したものであって、勝義としては存在しないものである¹²⁾」という説明がでてくるので、勝義法の名をここに入れて考えることに躊躇するが、やはり分類するとすれば、ここに入れるべきであろう。仏語に対する特別の認識があったにせよ、基本的には勝義法と言えども、世間の言葉によって表わされるものであり¹³⁾、そしてその言葉自体は、ここに言われるように、勝義としては非存在と見るのがパーリ阿毘達磨の基本的を考えであったであろう。しかし Vism. や Abhidh-s-mhṭ. にその分類の項目がなかったように、パーリでは仏語の問題を正面から問題にすることがなかったように思われる。

1) 後述の As. の paññatti の定義参照。

2) As. (p. 51) には、増語路は「増語の路たる諸法が増語路である (Adhivacanānaṃ pathā dhammā *adhivacanapathā*.) とされる。Moh. (p. 111) には、「それら増語の

路たる義(対象)が増語路である」(*Tesaṃ adhivacanānam pathā atthā adhivacanapatha.*)とある。*DAT* (vol. II, p. 139)には「路とは転起の道、転起の境界である」(*Patho ti pavattimaggo pavattiya visayo.*)とある。

- 3) インドでは非常に古くから、いかなる事物もそれ独自の名を持っているのであり、名によってのみ、それは個別的なものとなる、という考えがあった。つまり、もろもろの事物は「ことばによる捕捉」(*vācārambhaṇa*)に他ならない(中村元「古代思想」選集一七卷二五九頁参照)。ウパニシャドにおける現象界の一切の事物を表示する「名称と形態」(*nāmarūpa*)という呼称も、このような名の機能的性格が反映されているよう。
- 4) *Moh.* p. 111 'kevalaṃ padatthamattam eva vireso.' 'nipphatti-nimittabhedadassattham pana nesaṃ vibhāgena padattho dassito.' とある。
- 5) *BOS* 版 *As.* では *adhivacanamattam* とあるが *vacanamattam* と訂正すべきである。
- 6) *adhivacana* は普通「増語」と漢訳され、六触のうち意触が特に増語触と呼ばれるが、その理由は、即ち増語は意触の増上なる (*adhika*) 所縁であるからである(横山紘一『名と増語と想について』印度学仏教学研究第24巻第2号)。北伝では、このような名と第六意識との関係から *adhi* の増上の義が見い出されるが、パーリでは名とその指示対象との関係から増上の義が見出される。*DAT* (II. p. 139) には「*adhi* の語は上位たること (*uparibhāva*) においてあり、上位の語 (*uparivacana*) が *adhivacana* である。何の上位か。知らしめられるべき義(対象)の[上位]である。これがよく知られた意味である。或は、従属する語 (*adhiṇaṃ vacanam*) が *adhivacana* である。何に従属するか。対象に、である」とある。前者の解釈は、前述の相応部の一節「名は全てに勝り、全ては名に従属する」と相応するものであろう。名(*nāma*)のもつこのような構造的特質から、*nāma* の類語 *adhivacana* が導き出されたのではないだろうか。後者の解釈は、これとは全く逆で、言葉の方が指示対象に従属する、という考えのようで、一般的ではないだろう。
- 7) *S.* (III, p. 71) にこれら三つの路が説かれ、三つとも差異なしに用いられている。*Spk.* (II. p. 279) に「これら三とも、相互に同義語 (*vevacana*) であるとするべきである」とある。
- 8) Rhys Davidsはこれを「[name] given by general consent on a special occasion」(*Buddhist Psychology*, p. 341, n. 2) と訳している。
- 9) *Moh.* (p. 110) では、色(*rūpa*)もこの中に含めている。
- 10) 水田恵純『仏教における言葉論』(伝道院研究紀要第24号)、広瀬智一『灯論釈における外教受容の形態』(印度学仏教学研究第30巻第1号)参照。
- 11) *Sv.* (II. p. 977) には、四無色蘊は *nāmana* の義によって名であり、*nāmana* の義とは *nāmakaraṇa* の義であるとあって、以下 *As.* の所説と同様に説明がなされている。(以下の註省略)

<キーワード> 名, 増語, サンケータ (*saṅketa*)

(同朋大学助教授)